



## 第55回 稲刈りの風景をみながら

## ▼稻刈りの思い出

先日、近所を散歩していたら小さな田んぼがあり、イネが稻架(はざ)に干してあった。その風景を見て、小さいころの稻刈りのことを思い出した。私は鳥取県郡部の出身で、兼業農家だったので、田植え、農薬散布、草刈り、稻刈りなど、すぐ間近で見て育った。とくに稻刈りのあとに、家族総出で田んぼで脱穀する作業が大好きだった。秋晴れのもと、稻架で乾燥させたイネを脱穀すると、糲米(もみごめ)と大量のワラ束ができる。このワラを積み上げ、小山のようになったワラ山で遊ぶのが楽しみだった。ワラはギザギザしていて、風呂に入るときスリ傷がひりひり沁みた。あの稻ワラの山で遊ぶ楽しさを、ぜひ子供たちにも味わってほしいが、そうはならないだろう。今では、稻刈りはコンバインが、収穫・脱穀・稻ワラの粉碎を自動的にやってくれるので、ワラを積み上げる必要がない。私の記憶している脱穀とワラ山の風景は、今は昔のものとなっている。

## ▼機械化(道具)がもたらすもの

コンバインや田植え機の開発は稻作農家の悲願だったかもしれない。黒沢明の映画「七人の侍」で、最後に生き残った侍たちが、村人たちの田植えの風景をみながら去っていく有名なシーンがある。村人総出で、唄を歌いつつ、生き生きと田植えをしている印象的なシーンである。今は田植え機に苗箱をセットし、短時間で田植えができてしまう。医学の世界でも、戦後70年間で、内視鏡、エコー、CT、MRIなど、多くの医療機器が発達した。現代の医師は、過去には想像もしなかった機械による「まなざし」を獲得した。まるで、人体の内部を透視しているような感覚である。以前は経験を積んだ医師が、長い時間をかけ患者の身体をじっくり診察して診断していた病気が、今ではCTを使えば研修医でもすぐに診断できてしまう。でも、私は思うのだ。医師はCTによって、「患者をどのように診るか」という本質的な態度まで、影響されていないだろうか。工学の世界では、こういう現象を

アフォーダンスというらしい。コーヒーカップは指でもち、バットはグリップを握る、CTは医師に「撮りなさい」と命じる、そのように道具が私たちの「行動」や「まなざし」を規定してくる。身の回りにあるさまざまな道具、スマホ、テレビ、掃除機、ウォシュレット等々、すべて生活のあり方を規定している。もし災害で停電や断水となれば、どうやって水を得て、暖をとり、食料を手に入れるのか。

近所にある田んぼの稻架をながめながら、そんなことを考えていた。私たちの文明は、ずいぶん遠くまで来てしまったのだ。小さいころの家族総出の稻刈りの風景はもうない。機能集約型のコンバインがすべてをやってくれる、そういう時代に、人間の得たものと失ったものは何かと考えてみる。村人総出で稻刈りをした時代にあった、手触りや汗や苦しみや喜びを、すべてすっ飛ばすような、進歩という名の何かとんでもないことの渦中に、私たちは置かれているのかもしれない。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにぐち しんいち)